

Mon Nara



Numéro295 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会

FÉV. 2021 2月号

2021 年度総会開催—「菜宴」にて

2月11日(木・祝)、「菜宴」(奈良市小西町)において、奈良日仏協会の2021年度総会が開催されました。出席者14名(最終15名)、委任状59名、合計73名で、現時点会員総数97名の過半数を越え総会が成立したことを確認後、三野会長を議長に議事が進められ、次のとおり議案が承認されました。1)2020年度活動報告、2)2020年度決算報告、3)2020年度会計監査報告、4)2021年度役員選出、5)2021年度活動計画、6)2021年度予算。

2020年度活動では、コロナの影響で、美術クラブ例会、フランス・アラカルトの回数減や懇親会の中止など、活動の縮小を余儀なくされたなかで、秋の教養講座を放送大学スペシャル講演として実施、過去最多の受講者を得たこと、ガイドクラブ、シネクラブ、Mon Nara発行は予定どおり実施できたことが報告されました。2020年度決算は、今期の収入387,647円、支出373,499円、次年度繰越金額1,461,102円となり、三木監事より、証票がきちんと整理され正しく会計処理がされているとの報告がなされました。

役員選出では、長年にわたり協会活動に貢献された野島正興理事が退任することになりました。2021年度役員は、会長：三野博司、副会長：オリヴィエ・ジャメ、浅井直子、事務局長：杉谷健治、理事：南城守、藤村久美子、中辻純子、高松洋子(会計)、喜多幸子、藺田章恵、監事：三木正義、顧問：坂本成彦の陣容となります。

新年度の計画としては、先が見通せない部分はあるが、例年どおりの文化事業、交流活動を実施、さらに秋の教養講座とは別に放送大学との共催講演会を実施することとし、これに伴う新年度予算が了承されました。2020年度決算、2021年度予算の詳細については、別紙(折込)をご参照ください。

最後に、出席の理事、会員全員から自己紹介や近況報告をいただきました。今年は懇親会が中止となり淋しくなりましたが、来年は賑やかに開催できることを祈っております。(事務局)



《三野会長 2021 年度あいさつ》

カミュのエッセイ「Les Amandiers アーモンドの木」は、原文の全集版でわずか二頁、1940年、第二次大戦が始まったころ書かれました。ちょうどこの年の3月、アルジェリアを去ってパリの新聞社で働きはじめたカミュは、ドイツ軍によるパリ占領のあと、クレルモン＝フェラン、リヨンへと移動します。このとき、ヨーロッパの暗黒の悲劇的狀況にあって、武力よりも精神の力に信を置こうと呼びかける彼は、祖国アルジェリアのアーモンドの花を想起するのです。アルジェの高台では、たった一夜のうちに、二月の冷たく澄んだ夜に、アーモンドの木々が白い花でおおわれます。「このはかない雪のような白い花卉が、度重なる雨や海からの風に耐えるのを見て、私は驚嘆した。しかし、毎年、その白い花はもちこたえるのだ、ちょうど果実を準備するのに必要なだけの期間を」。不幸のただなかにあるヨーロッパにいて、生の重圧が耐えがたく思われるとき、カミュは「あれほどの力がまだ無傷であるあの輝かしい国々のほうを振り返る」のだと言います。必要なのは、「白さと樹液によって海からのあらゆる風に耐える力」であり、まさにそれこそが「世界の冬にあって、果実を準備する」のです。私たちもまた、すでに一年近くが経過しようとする陰鬱な状況をさらに耐え忍んで、桜の白い花が早春の光のなかで微笑んでくれることを、希望とともに待ちたいと思います。本年も奈良日仏協会をよろしくお願いいたします。



アビニョン近郊のアーモンドの花。撮影：森井桂子(会員)

《事務局からのお願い》 会員名簿を更新する時期になりました。記載事項に変更のある方は3月31日までに、下記のいずれかの方法で変更内容をお届けください。1) Mail : sugitani@kcn.jp 2) FAX : 0742-62-1741 3) 郵送 : 〒630-0224 生駒市萩の台3-2-13 杉谷方 奈良日仏協会事務局 ※ お名前以外の掲載事項は自由に選択することができますので、掲載項目を変更したい方はその旨ご連絡をお願いいたします。

秋の教養講座 2020 (11/23) 講演「カミュ『ペスト』を読む」報告

◆◆◆秋の教養講座 2020 が、昨年 11 月 23 日 (月・祝)、放送大学奈良学習センターとの共催により、奈良県文化会館小ホールにて開催されました。講師は三野博司会長。三野会長が放送大学奈良学習センター所長を退任された記念として、放送大学の『スペシャル講演』として実施されたものです。コロナが広がって以来、カミュの『ペスト』が世界中で読まれ、日本でも『ペスト』についての三野会長の談話が新聞等でも大きく取り上げられました。今回は、その関心の高さを反映してか、放送大学の受講者と合わせ、過去最高の 65 名が聴講しました。

講演は、カミュの生涯を踏まえたうえで、『ペスト』が書かれた当時フランスの状況、『ペスト』には、市民対ペストの集団劇と、個人の物語が交錯していることを指摘した後、『ペスト』第 1 部から第 5 部まで、季節とともにペストが推移していく流れを分かりやすく解説いただきました。とくに主要人物の会話を対話劇として再構成し、2 名の役者の朗読により再現する演出が精彩を放っていたことです。この作品を読んだときは、議論が多く、抽象的で難解な印象がありましたが、生身の人間の声を聴くことで、対話の意味するところがくっきりと浮かび上がるように感じられました。印象に残ったのは、幸福や自由を奪われ、絶えず敗北を強いられる終わりのない災禍に対して戦う主人公の医師リュウの姿で、神にも超越的な価値にも依存せず、ひたすら人間の次元で戦おうとする現実主義的な生き方に改めて感銘を受けました。



出版当時は第二次世界大戦の戦禍の記憶が生々しいときで、ペストをナチス、ペストと戦う人々をレジスタンスになぞらえて読まれたが、今日では、それだけでなく、また単なる疫病に対する戦いの物語でもなく、人間を襲う広い意味での不条理な暴力に対して戦う物語として読まれるべきだとの結論でした。

紙面では十分魅力をお伝えできませんので、放送大学 BS231 チャンネルで放送される番組をぜひご覧ください。詳しい時間が決まれば、また皆さまにお知らせします。(杉谷健治)

◆◆◆カミュの小説では、アルジェリアの町を襲ったペストの発生から終息までが、医師のリュウの眼を通して語られます。興味深い点は、主要人物が男性 (保健隊を結成するタルー、新聞記者ランベール、市役所職員グラン、パヌルー神父、オトン判事) に限られ、それぞれが行政・司法・医学・宗教・メディアを代表していること、さらにペストとの闘いの中で、彼らに当事者意識が芽生えることです。唯一、女性として登場するのがリュウの年老的な母親で、ペストを全く恐れずに、罹患したタルーを献身的に看病する彼女の姿が際立っています。彼女に一種の神々しさを感じられるのは、三野先生によれば、カミュの母親が投影されているためとのこと。ケアの仕事は女の役割とされてきましたが、カミュの作品では、女性の「献身」よりもむしろ、男性を凌駕する「冷静沈着さ」や「強さ」が描かれているような印象を持ちました。三野先生のお陰で、カミュの作品について様々な思いを馳せる有意義なひと時を過ごすことができました。(村田京子)

講演会を迎えるまで

三野 博司

今年の「教養講座」を私が担当すると決まったのは、3 月の理事会でした。5 月になって、放送大学本部から「スペシャル講演」の依頼が来ました。学習センター所長退職後の仕事であり、義務ではないのですが、引き受けることにして、「教養講座」といっしょの形でやりたいと答えました。メールでの打ち合わせのなかで、先方からは、「原文の引用部分については、朗読をしてもらう方をお願いする必要はないでしょうか？」との問いかけがありました。朗読は事前録音、あるいは会場での朗読も可能とのことでした。ひとつの考えがわいて、こうたずね返しました。『『ペスト』は男性の対話が多いです。彼らが、ペストと闘いつつ、その闘いの意味や、生きる意味について対話しながら、友情を深めていきます。男性二人を会場に招いて、この対話をしてもらうことも可能ですか?』こうして、対話劇をやることになったのですが、作品の理解を深める助けになったとしたら幸いです。



『ペスト』の講演会に参加して

竹本寿史（たけもと としふみ）

講演会后、放送大学番組のインタビューで、『ペスト』を読みたいと思いますか？」との、さもありません質問に、素直でない私は、「いや、読もうとは思わない」と答えた。しかし、この正月、初詣も避けて家に籠って読んでみた。この小説には多くの人物が登場するが、印象に残った人物を4人に絞り、彼らを寸評することを試みた。

1) 医師リュウ：封鎖されたオランの街から恋人の待つパリに帰りたいと懇願する新聞記者ランベールに対し、彼は、医師としての「理念」から、ペストに感染していない証明書を書くことを拒絶する。しかし、彼は、官僚的な「理念」に生きる人間ではない。むしろ、事態を「明るく（明晰に）見極める」ことで、あたかもコロナ禍の中、献身的に医療に従事する多くの医師と同じく、医師としての自分の務めに励む一市民として描かれている。

2) 小役人グラン：小説を書くことに熱中しているが、冒頭の一文のみ書き直しつつづけている、冴えない男。しかし、彼は、ささやかな仕事で役に立ちたいということだけで、保険隊の事務の要の役割を果たしていく。そういう彼であるが、クリスマスの日に、路上で倒れ、病床で死を覚悟し、リュウに、あの小説の原稿を「焼き捨ててくれ」と頼む。しかし、翌朝、奇跡的に回復し、原稿を焼いてしまったことを後悔する。彼は、滑稽かつ凡庸きわまる老人として登場するが、小説『ペスト』の「語り手」は、「静かな美德の本当の代表者」だったと評価している。

3) 裕福な青年タルー：彼は、手帳に詳細な観察日誌を綴っていて、保険隊を結成する。「一体何が君をそうさせるのです？」と医師リュウに聞かれ、彼は、「わかりません。僕の倫理かも知れない」と答える。「どんな倫理です？」との問いに、「理解することです」と返答する。二人の行動様式は似通っているが、小説の後半で、彼の行動の原点が明らかにされる。彼の父親は検事であり、若い頃に、父親が死刑判決を言い渡す法廷に立会い、衝撃を受け、死刑反対の持ち主になる。彼にとっては、ペストも死刑判決と同じものなのである。しかし、ペストは、そういう彼にまで襲い掛かる。看病するリュウに、彼は、苦痛の攻撃に動揺も見せず、「勝負は負けそうな勢いだ」とユーモアに語るが、付き添うリュウのお母さんに「今こそすべてはよい」と呟いて死んでいく。

4) 新聞記者ランベール：オラン市の衛生状態を取材に来た彼は、オラン市が封鎖され、自由を奪われたことの憤りを、医師リュウにぶつけ、実際に脱出を何度も試みる。しかし、脱出を目前にして、リュウやタルーに会って、「自分一人だけが幸福になるのは、恥ずべきことかもしれない」、「こうして見た通りのことを見てしまった今、僕はもうこの町の人間だと分かりました。この事件は、我々みんなに関係のあること」と語り、保険隊に参加する。

彼ら4人はいずれも、生き方はそれぞれ違うが、ペストという災難にあって、自分にできることをするという、地に足の着いた真っ当な行動をした人達である。彼らの交わす会話の中には、心に響く名言が多くある。

今思えば、講演会に行く前に、『ペスト』を読んでいくべきだったと後悔している。講演を聴けば、判るだろうという安易な気持ちで参加した。その横着さとは反対に、講演は、放送大学の講義を兼ねた、読んで行くのを前提とするような、厳粛なものであったので、さっぱりついて行けなかった。小説『ペスト』には、寸評した彼ら以外にも多くの人物が登場し、それぞれの人間模様が克明に描かれている。また、哲学的な命題も扱っている。この一級の文学作品は、講演者のお話やレジュメがなかったら、十分には読みこなせなかっただろうと思う。

小説『ペスト』の最後で、この物語の「語り手」が医師リュウであることが明らかにされるが、彼は、これを書くことを決心した理由に言及する。それは、「沈黙する者たちの仲間にならないために、ペストに襲われた人々に有利な証言を行うために、せめて彼らになされた不正と暴力の思い出だけでも残すために、そして、ただ単に、災厄のさなかで学んだこと、すなわち、人間のなかには軽蔑すべきものより賞賛すべきもののほうが多い、と語るため」だったと。

コロナ禍の真っ只中にいる我々は今、如何にコロナと闘うか汲々としているが、これが終焉を迎えると、すぐに全てを忘れてしまうだろうと思う。だからこそ、忘却しない為に、このコロナ禍での日常を記録することが必要だと思う。タルーが手帳に記録したように。なぜなら、疫病は、天災と同じく、時をして襲ってくるものだから。そして、それに備えるために。

読書案内：アルベール・カミュ（1913 - 1960）の小説（編集部）

1942年『異邦人 *L'Étranger*』1957年『追放と王国 *L'Exil*』（短編集）1947年『ペスト *La Peste*』1971年『幸福な死 *La Mort heureuse*』（死後刊行）1956年『転落 *La Chute*』1994年『最初の人間 *Le Premier Homme*』（未完の遺作）

2020 年度ガイドクラブ 聖林寺と談山神社散策（10/10）報告

◆◆◆台風の接近で開催が危ぶまれたが、午後から天候が回復するとの予報が出て開催となった。行き先は桜井市の聖林寺と談山神社。聖林寺では雨も止んだ。もう 35 年以上前になるが結婚した頃の、和辻哲郎の『古寺巡礼』に出てくる仏像を巡って主人とあちこちのお寺に行った時、聖林寺も訪れたはずだが、ほとんど忘れていた。有名な十一面観音像を見ることが出来た。この仏像は頭の上正面に 3 つの菩薩面、向かって右に 3 つの憤怒面、左に 3 つの牙上出面、後ろに暴悪大笑面があり菩薩の面と合わせて 11 面であった。頭上には如来がある。このことをお寺の住職様から聞いて大変勉強になった。今後十一面観音を見る時はさらに深く理解できるかもしれない。談山神社には 1 月 2 日に仕舞の奉能があるので毎年来ていたが、この日、権禰宜様から大化の改新に纏わる話や猿楽がここから始まったというようなことを初めて聞いて歴史の勉強になった。有志による懇親会ではお店の方の心づくしの料理で、安くて素晴らしいお料理を頂くことができた。来年のガイドクラブも本当に楽しみである。（小寺順子）

◆◆◆C'est avec grand plaisir que j'ai pu participer à cette journée de visite. En effet, le Tanzan-jinja et le Shorin-ji, ainsi que la ville de Sakurai dans sont ensemble, sont des endroits chers à mon coeur qui me rappelle mon premier séjour au Japon il y a six ans maintenant. C'est donc en agréable compagnie que j'y suis retourné une fois encore. J'ai eu notamment la chance de faire connaissance avec des gens intéressants et sympathiques, qui ont rendu la visite de ces lieux chargés d'histoire encore plus intéressante. Je remercie, une fois encore, l'association franco-japonaise de Nara d'avoir organisé cette superbe journée. (Nicolas Maini)

とても楽しみに、この日の見学に参加することができました。というのもじっさい、談山神社と聖林寺、桜井の町全体は、6 年前のはじめての日本滞在を思い出させてくれる、私の心の大切な場所だからです。楽しい仲間とともに、もういちどこに戻って来ました。魅力ある感じのいい方たちと知り合う機会となり、その皆さんのおかげで歴史に満ちたこれらの場所への訪問が、よりいっそう興味深いものとなりました。この素晴らしい一日を企画してくださった奈良日仏協会に、今いちど感謝申し上げます。（ニコラ・マイニ）

◆◆◆三重から毎年参加させていただいていますが、大好きな奈良の寺社を中心に訪問できることをいつも楽しみにしています。当日は日本を直撃した台風の影響もほとんどなく、参加者の皆様の日頃の心がけに感謝しました。榛原を出た近鉄電車が初瀬の谷に入り高度を下げながら大和盆地に近づき、右手に三輪山がなだらかな稜線を見せ大和朝倉駅を過ぎると、一気に視界が広がります。奈良にやって来たことを実感する瞬間です。三重大学留学生エノラ・ルポーニュさんも津から参加しました。聖林寺に到着早々、真正面に三輪山とそれに連なる大和青垣の境内からの眺めに圧倒されました。本尊の石造のお地蔵さまは何ともユーモラスなお姿で、たくさんの安産をかなえ近郷の人たちを笑顔にしてきたそうです。十一面観音さまは本来なら東京出張中のところ、偶然にもお会いすることができました。優しいお顔を眺めていると「もう来る頃なと思っていた」と、声を掛けられたような気がしました。談山神社は元々はお寺で、聖林寺はその別院であったとのこと。向かいの多武峰観光ホテルの 5 階レストランからの眺めは、十三重の塔など境内の伽藍を正面に眺めることができ素晴らしかったです。紅葉の時期もきっと素晴らしいことでしょう。神社の縁起絵巻には蘇我入鹿の首が飛んでいる有名なシーンがあり、「これからはしっかり仕事をしよう」と心を入れ替えました。ニコラ・マイニさんはシャルトル近郊の出身で、桜井とシャルトルが姉妹都市提携をしているので、過去にも桜井を訪れたことがあるとのこと。神様は異なれど歴史や文化の縁でつながっているのでしょうか。今回のガイドクラブに参加して行きたい場所や好きなものが増えました。桜舞う聖林寺、雪の談山神社、桜井と縁のあるシャルトル、奈良の地酒。そして、神も仏もある土地に暮らしていることを改めて実感し、宗教や国籍の違いや疫病への不安を乗り越えるためのヒントを、もらうことができました。（三重大日仏協会 田中豊士）

◆◆◆奈良・三重・京都・大阪・兵庫の 5 府県から 14 名の参加者が桜井駅に集合。聖林寺では倉本明佳住職様が私たち一行を暖かく迎え入れ、懇切丁寧にお寺の歴史や国宝十一面観音の仏像の解説をしてくださいました。仏像の人目に触れない部分まで施された手の込んだ細工から、仏師の仏像を敬う気持ちが以心伝心で伝わります。談山神社の坂口権禰宜様のお話には、歴史の有為転変を思わないではいられません。この地には耳をすませば日本の歴史や文化の裏表に関わった人々の足音が今もこだましているかのようです。聖林寺も談山神社も、森の中のひっそりとした佇まいの中に、長い年月を通して建物や神像・仏像を守ってきた人々の心ばえが受け継がれているような気がしました。桜井駅近くの居酒屋「千宝」での懇親会では、美味しいお料理とお酒のおもてなしのおかげで楽しく盛り上がり歓談に興じました。この日は天候も神仏や人の縁も含めてすべてに恵みがあり、感謝の気持ちにみたされ、忘れがたい一日となりました。（浅井直子）



第55回奈良日仏シネクラブ例会（10/25）『冬物語』（1992）報告

◆◆久しぶりのフランス映画でしたが、難解なものかと構えて行ったら、とても分かりやすく、楽しめる映画でした。地下鉄やバスの中の光景や普通の人の家庭内での日常生活がしっかりと描かれていて、ちょうど年代的にも私がアルザスで暮らした頃の話だったので、その頃のことが懐かしく思い出されました。クリスマスから年末へと続く特別な時期に対するフランス人の高揚感もうまく織り込まれていたと思います。リアルな描写が続いたので、おとぎ話的な結末にはちょっと違和感もありましたが、その矛盾とも言える対比がこの映画の不思議な魅力になっていたのかもしれないと思いました。ともあれ、コロナで弱っている私たちの心はハッピーエンドで少し癒された気がします。しかし、フィクションの世界でも家族や恋人との身体的接触を表現できないなら、コロナ終結までの映画や演劇は一体どうになってしまうのだろうか、そんなことも考えさせられました。（辻みち代）



◆◆主人公フェリシーは夏の海辺でシャルルと情熱的な恋愛をするが行き違いで再会は不可能という状況で物語が展開します。前回見た『海辺のポーリーヌ』と同様、登場人物が議論する場面が多く、理念的な印象を強く受けました。ロメール監督は、映画の中で、フェリシーに、「頭でっかちな人は嫌い」と語らせていますが、彼女自身は、シャルルとの束の間の恋愛を至上のものとし、再び会えるという理想を追及することをやめません。そこに矛盾を感じてしまいました。またそれに振り回される二人の男があまりにも哀れ。この映画のポイントは、なかでも議論されるパスカルの「賭の論証」にあると思います。フェリシーにとってはシャルルと再び出会えることに賭けること、それこそが人生を豊かなものにできると。それを踏まえて三野会長は、上映後のディスカッションの部で、精神分析医の中井久夫が患者に接する場合の楽観論と悲観論を比較した議論を紹介していましたが、それは楽観論に立つことは容易ではないが事態を好転させる芽が発見できるというもので、悲観論が世相を覆いがちな昨今、大事な心構えのように思いました。（杉谷健治）



◆◆フェリシーとシャルルの恋人同士はブルターニュのヴァンヌ駅で再会を約束して別れたものの、フェリシーの住所の書き間違いで二人は離ればなれになってしまう。運命のいたずらのような成り行きにも、フェリシーの心は折れることなく、パリで美容師として働きながら、シャルルとの間にできた娘を、家族や新しい恋人たちの助けを借りながら、シングルマザーのまま育てていく。彼女は自宅と職場や彼らとの間を行き来する時、市バス、メトロ、RER（パリ近郊鉄道）、SNCF（フランス国鉄）を乗り継いで、自らの足で歩いてゆく。家族や恋人たちと話す時は饒舌な彼女だが、一人または娘と乗り物で移動している時は、疲れのせいか、無言でぼんやりとしていることが多い。その表情がどこか印象に残る。家族や友人との関係を大切にしながらも、自分の心を偽ることなく、自らの人生は自ら責任を負って生きる姿に、フランス人も日本人もかわらない、日常を生きる等身大のひとりの女性が写しとられているからだろうか。（浅井直子）

第56回奈良日仏シネクラブ例会案内（2/28）「めぐり逢う朝」（1991年、115分）

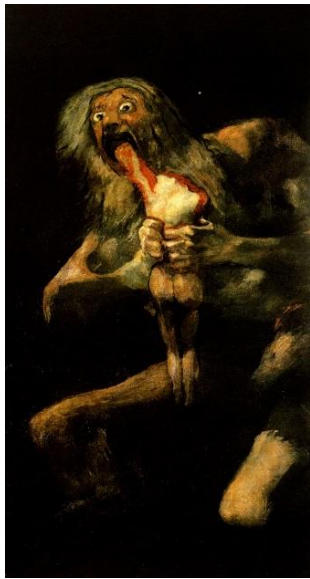
17世紀フランスのバロック時代の音楽家サント＝コロンブ（作曲家、ヴィオール演奏者）の人生と、彼に師事して名をなしたマラン・マレとの師弟関係を描いた作品。サント＝コロンブは著名な音楽家として名声を博した実在の人物だが、その生涯はほとんど知られていない。物語は彼の音楽を愛する小説家パスカル・キニャールが創造したフィクション。音楽・映像・衣裳・演技・台詞・語りが見事に照応した、アラン・コルノー監督の傑作。音楽と絵画、芸術創造と実人生、演奏家の愛と魂、人間の生の儚さ、愛の残酷さと美しさ、世界の神秘…。監督は神秘的な部分を描くのに、谷崎潤一郎の随筆『陰翳礼讃』、溝口健二の映画『雨月物語』と『新平家物語』を参考にしたという。原作者パスカル・キニャールは、ギリシア・ローマから中国・日本の古典に至る古今東西の文学に通じた博覧強記の作家だが、この小説は『今昔物語』を下敷きにしたという。武満徹はこの映画を観た時「不思議な懐かしさと、親しみを覚えた」と記している。マラン・マレの役は青年期は息子のギョーム、成人後は父ジェラルムのダブルデビュー父子が演じている。37歳で早世してしまったギョームが20歳の時のデビュー作でもある。映画では、サント＝コロンブが弟子を通じて後世に残したヴィオールの音色に触れ、目に見えないものの存在に想いをはせることができる。音楽家は芸術のために身を投じるのか、人々に聴いてもらうために作品を作るのか、との問いかけもなされている。

※シネクラブ例会日時等は本誌12頁参照。



第3回美術クラブ例会「美術の力-逆境の中から誕生した傑作選」(12/12) 報告

◆◆◆コロナ禍により2回延期されていた美術クラブの例会が、万全を期して2020年12月12日に無事開催された。これまでの活動は、序章として2018年3月に「ゴッホ展」(京都国立近代美術館)、第1回目は2018年9月に「フランス風景画展」(国立国際美術館)、第2回目は2019年7月に「ギュスターヴ・モロー展」(あべのハルカス美術館)といずれも美術館での鑑賞会で、講演会形式は今回が初。実物はない分、画像をふんだんに使って、レンブラント、ゴヤ、ゴッホ、ピカソという17~20世紀の巨匠たちによって逆境の中で生み出された傑作群を辿った。冒頭で私は奈良の大仏様の話をした。疫病が蔓延し、天災、人災が繰り返される過酷な時代に、国家の安泰と人心救済の象徴として巨大な盧遮那仏が建立されたこと。信仰の力とともに見る者を圧倒する造形の存在感と、だれも見ることが無い地獄や極楽を、さも眼前にあるかのように具現する美術力に、往時の人々は夢を託したのである。洋の東西を問わず、困難な時代にこそ美術は一層の光彩を放つ。生み出された名作の数々は悲劇や苦悩を越えたところにある「夢と希望」を垣間見せてくれるものだ。人間への信頼、そして生命への賛美。



「我が子を食らうサトゥルヌス」
 (「黒い絵」連作 1819-1823, プラ
 ド美術館)『西洋絵画の巨匠ゴヤ』
 小学館 より

疲弊した人心を復活させる美術の奇跡がそこにある。コロナ禍の今日、まさに「美術の力を今こそ！」である。ご参加いただいた方々に心から感謝申し上げます。(南城守)

◆◆◆あつという間の90分でした。絵画作品の中に秘められている時代性、画家の人生、そこから生み出された芸術性について本当にわかりやすく解説していただきました。描かれている題材、絵の印象や描写の技法など、今まで何となく好き嫌い、印象的、といった感じで見ていたものが、生きて自己主張して語り掛けてくるのだという思いです。その語り掛けが見るものに呼び覚ます感動が芸術なのかと思います。あらためていろいろな絵を見てみたい、個人的には、レンブラントについてももっと知りたいという思いが強くなりました。他の画家や作品についても、又お聞かせいただける機会を作ってください。(白鳥保二)

◆◆◆待望の美術クラブ例会、至福の時間を過ごしました。現在、戒壇堂工事のため東大寺ミュージアムで特別公開されている四天王立像の見どころに始まり、その仏師国中公麻呂が大仏建立・東大寺造営にあたり、現在のコロナ禍の社会状況を彷彿させる天平時代の疫病猖獗・地震天災・政治の乱れを鎮護国家によって終息させようとし、その成果がまさに逆境の中でここ奈良の地に花開いた(身近にあるため日頃気付かないが現在の視点では美術の力とか言いようのない)世界遺産であったことを痛感しました。巨匠たちの生涯とその逆境の中で誕生した傑作群の解説に聞き入り没頭していると、あつという間に時間が過ぎてしまいましたが、先日、「ロンドン・ナショナル・ギャラリー展」で、レンブラント、ゴヤ、ゴッホの作品を鑑賞した時、

南城先生の語りが甦り一層深い感銘を受け、このコロナ禍の中で人は美術の力に励まされに、美術館に足を運ぶのだなと感じ入りました。次回の例会は、ピカソのパリ時代の画風の変遷についてもっとお話を伺えたらとリクエストいたします。(吉村公彰)

◆◆◆「なぜこんな絵が描かれることになったのか」。「それがとんでもないことが起きたんです」。一瞬講談を聴いているような感じにも襲われました。17世紀以降の4人の画家の4枚の絵に焦点を当て、途中、厨房画、肖像画の話、絵具の材料の話、レンブラント光線、キュビズムの誕生と経緯など、美術の基礎的な知識が織り交ぜられ、さてこの4枚の絵がどうつながるのかと心配しながら聴いていたところ、そこに明快な主張がくっきりと浮き彫りにされました。豪奢な生活から転落した極貧のなかで注文もなくなり仕方なく自分のために描いたというおぞましい静物画、大病し社会的動乱に巻き込まれたあげく描かざるをえなくなった悪夢の図、仲間から見捨てられ家族からも忌み嫌われ最後は自殺にいたる狂気の風景画、数千人の女性や子どもが惨殺された爆撃を告発する怒りをこめた絵、いずれも苦難な状況に直面し、それを突破しようとするエネルギーが誰も見たことのないような絵の風景を出現させたわけです。最後に、ゲルニカの絵の片隅に描かれた一輪の花に象徴されるように、芸術の力にこそ「夢と希望」を託すべきだと言われたのが印象的でした。(杉谷健治)



「星月夜」(1889, ニューヨーク近代美術館)
 『「ゴッホの夢」美術館』小学館 より

「モリエールの喜劇」(7)『ジョルジュ・ダンダン』(George Dandin, 1668) 山本邦彦

間抜けな亭主が浮気な女房にやり込められるというテーマは、中世以来コントや笑劇(ファルス)でおなじみのものでした。モリエールはこれを借り受けて、ヴェルサイユ宮殿での祝祭用に3幕の散文劇『ジョルジュ・ダンダン』を書き上げました。これは序幕と幕間と終幕にリュリ作曲の歌と踊りから成る牧人劇(パストラル)の枠をはめるという奇妙な作りでしたから、おそらく招待された観客は芝居の鑑賞は差し置いて、お祭りらしい華やかなエンターテインメントに酔いしれたことでしょう。

しかし、この喜劇が市中で牧人劇なしで演じられるようになると、従来の笑劇にはなかった特徴がはっきり見えてきました。それはこの作品が時代の変化を的確に捉えていたということです。17世紀も後半になると都市では商売で儲けた富裕町人層が台頭してきました。農村でもまた、小作農を収奪する形で富裕農民層が育っていました。こうして平民が力を付けてきた時代は、逆に封建貴族が没落する時代でもありました。

ジョルジュ・ダンダン(主人公)は裕福な農民でしたが、貴族の肩書きがほしくてたまりません。一方妻アンジェリクの親元ソタンヴィル家は肩書きだけで威張り散らす田舎の貧乏貴族でした。そこでお互い足らざるところを補い合う形で両家の縁組みが成立していたのです。ラ・ブリュイエルは『人さまざま』(1688)の中で、「金の必要が貴族を平民と和解させた」と皮肉っていますが、『ジョルジュ・ダンダン』がまさにその和解の実態でした。

初演以来、この芝居は主人公が3回も繰り返すへまを笑う笑劇仕立ての演出が主流ですが、時代背景を重視して作品に歴史的な意味付けを与えようとする立場から、1970年にジャン・ポール・ルシヨンがコメディ・フランセーズで演出した舞台は、旧体制下の社会構造を鮮明に浮かび上がらせた点で、ロベール・イルシュの名演技とも相まって、上演史上に名を留めています。



コメディ・フランセーズ:

左から ロベール・イルシュ(ダンダン), ミシェル・エチュベリ, ドニーズ・ジャンス(ソタンヴィル夫妻)

ホームズ物語とフランス(4)

長谷川 明子

「最後の事件」(The Final Problem, 1893年、短編集『シャーロック・ホームズの思い出』The Memoires of Sherlock Holmes 所収)は、ホームズ物語の中の人気作の一つである。宿敵モリアーティから執拗に命を狙われるホームズは、ドーバーを渡り、ブリュッセル、ルクセンブルグ、ストラスブール、バーゼル、ジュネーヴ、マイリンゲンへと向かう。その逃避行が読者の旅情を誘う。遂にスイスのライヘンバッハの滝で二人は決闘し、共に滝壺へ落下していくという結末。(画像: シドニー・バジェットによる『ストランド・マガジン』での初掲載時の挿絵, 1893年)

「ホームズ死す」に怒った読者から抗議の声が相次ぎ、シティ(ロンドンの金融・商業の中心地)には喪章をつけた人さえ現れた。そのため、「空家の冒険」(The Empty House, 1903年、短編集『シャーロック・ホームズの帰還』The Return of Sherlock Holmes 所収)でホームズを甦らせ、物語を書き続けることとなる。ドイルが、大ヒット中の作品の主人公を葬ってしまうかと思いつめたのは、彼が大衆作家ではなく純文学(特に歴史小説)の作家として評価されることを強く望んでいたからだと言われている。

一方、「フランスのコナン・ドイル」として売り出されたモーリス・ルブラン Maurice Leblanc (1864~1941)も、アルセーヌ・ルパン Arsène Lupin のために、純文学者としての生き方に躓きを覚えていた。フロベールの弟子であり、リアリズムの小説家として注目されていたものの、結果的には大衆作家に甘んじることとなり、「ルパンが私の影なのではなく、私のほうがルパンの影なのだ」と嘆いたと言われている。(参照: 『いやいやながらルパンを生み出した作家—モーリス・ルブラン伝』 Jacques Derouard 著, 小林佐江子訳, 国書刊行会, 2019年)

ルパン物語では、エルロック・ショルメ Herlock Sholmès という名前で、再三登場するホームズだが、ドイルの作品にルパンは一度も登場しない。



法人会員紹介

野菜ダイニング「菜宴」

<https://kokikubota.stores.jp/>

お店は近鉄奈良駅より徒歩1分の好立地にあります。とはいえ昨年来、コロナ禍のため苦戦を強いられています。そんな状況下、コロナ禍の打開策として、《美味しい非常食》をコンセプトに、レトルト食品「ポタジェ・ライス」を開発し、2020年12月から販売を始めました。科学調味料は一切使用しておらず、常温で2年持ちます。現在、奈良県内全ての郵便局で「ふるさと小包」として3月まで取扱中です。今秋からは、近畿全ての郵便局3,000局で販売予定です。新型コロナと闘う医療関係者を応援しようと、「ポタジェ・ライス」300食を桜井済生会中和病院に寄贈する活動も行っています。店頭でも販売しておりますので(定価税込600円)、皆様ぜひいちどご賞味ください。

★「ポタジェ・ライス」購入サイトは上記

奈良市小西町19 マリアテラスビル2F
Tel : 0742-26-0835 不定休
昼 11:00~15:00 (14:30 ラストオーダー)
夜 17:00~22:30 (21:30 ラストオーダー)
店長 : 久保田耕基 (くばた こうき)



ワインショップ「サン・ヴァンサン」

<https://stvincent.shop-pro.jp/>

フランスをメインに世界各国のワインを2000種類以上取り揃えております。ここで、今おすすめブルゴーニュ・ロゼ「キュヴェ・サクラ 2019」<ドメーヌ・キュヴェ・サクラ>を紹介させていただきます。春にしか入手できないブルゴーニュ・キュヴェ・サクラ。春の訪れとともに造られたロゼワインで、日本の風味とよくマッチングされています。ブリリアンテローズ色がかった美しいオレンジ色。2019年は非常にフローラルで、藤の花や白い花の香りの後に、ミラベルやプラムの香りが広がり、心地よいバターの香りも感じられます。味わいは豊かで力強いですが、ピノ・ノワールらしいフルーティーさとフレッシュさのバランスと、フローラルでスパイシーなフィニッシュのバランスが良くとれています。口当たりは軽く、赤いフルーツの果実味がフレッシュに感じられます。当店では通常2,980円で販売していますが、奈良日仏協会の会員様にはさらに特別に2,680円(税別)で提供させていただきます。(入荷が大変少ないため限定6本といたします)



- ◆産地：ブルゴーニュ地方 シェイイ・レ・マランジュ
- ◆品種：ピノ・ノワール ◆オーガニック：ビオロジック

奈良市学園朝日町2-2 米田ビル102
Tel : 0742-43-3832 月曜定休、
火~土：10:00~20:00、日・祝：10:00~19:00
店長：竹中宣人 (たけなか のりひと)

★2020年春からショッピングサイトが新しくなりました！(上記)

株式会社 NARA FRANCE

<https://www.narafrance.com/>

昨年5月に、奈良県生駒市に日仏通訳・翻訳、日仏ビジネスサポートの会社、株式会社 NARA FRANCE を起業いたしました。当方が17年間勤めていた在日フランス大使館での経験を活かし、商談や会議の日仏通訳を得意としておりますが、コロナ禍でフランスからリアルな来日がないため、オンラインでの商談通訳やオンラインセミナーでの司会、通訳を実施しております。

昨年はフランス・リヨン在住の日本人女性(友人で元大使館の同僚)と一緒に、「With コロナのフランスライフスタイル」としてコロナ禍でのフランスの日常生活や食のトレンドなどを紹介するオンラインセミナーを開催しました。また日経新聞社が主催するビジネスセミナー(オンライン)でも、フランスの講演者のスピーチを日本語通訳しました。

今後ともリモート商談会など、コロナ禍での日仏コミュニケーションをサポートいたしますのでどうぞよろしくお願いいたします。

連絡先：kaoruko.hayashi@narafrance.com
所在地：奈良県生駒市 代表：林薫子(はやし かおるこ)
写真：日経のオンラインセミナーでの通訳兼司会進行中の林代表



会員投稿

奈良日仏協会に入会させて頂いて

神澤 透 (かんざわ とおる)

2021年1月より入会させて頂くことになりました。皆さま、よろしくお願い致します。ぼくは東京に住んでおりまして、会の諸活動にはなかなか参加することができないと思います。昨年11月23日(月・祝)の三野博司会長の講演会を拝聴しに参りました折、皆さまが活発にイベントを行われていることを浅井副会長からお伺いし、俄然奈良日仏協会に興味を抱きました。遠くから会報を拝見する会員になることでしょう。

ぼくは放送大学の東京文京学習センターに所属して、文学や歴史等を学んでいます。二つのコースで卒業研究を執筆しました。また、それらと並行して『星の王子さま』の原文読解をする会を組織したり、フランス語初級者さんたちと一緒に、三野先生の『「星の王子さま」で学ぶフランス語文法』を使用させて頂き、勉強会も行ってきました。

このように『星の王子さま』に関わりまして、また一方で2020年度の卒業研究のタイトルを『「バンド・デシネ 異邦人」の考察』にすることにしました。研究過程において、Albert Camusの著作や三野先生のご著書を熟読してきました。そして卒業研究報告書を放送大学野崎敏教授に提出しました。その小論を三野先生の感動的な講演会の折に、先生に手渡すことができました。受け取って頂いたばかりか、駄文を読んで頂き、ご感想まで頂戴致しました。それがとても良い思い出になっています。その卒業研究は放送大学のコース内で優秀作品に推薦して頂き、4月から5年間放送大学の学生用Webシステム内で、後に卒業研究を履修する方々の参考資料として公開されることになりました。

今後とも、『星の王子さま』に関わる翻訳論やアダプテーション理論の周辺を考察していきたいと思っています。Albert Camus作品の味読も続けていきます。



熊野古道とフランスの巡礼路

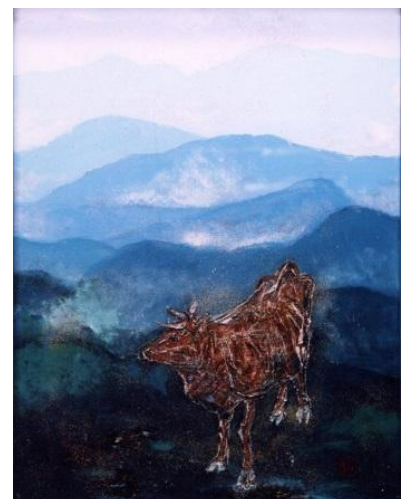
赤木 睦代 (あかぎ むつよ)

みなぎる土着性とその素朴でユーモアさえ感じる牛に魅せられて50年、ひたすら牛を描き続けてきました。迫りくる躍動感あふれる牛のリアリティーを求めて、国内はもとよりフランスをはじめ海外20カ国以上を巡りました。

今年は熊野本宮大社にて、熊野古道を表現した作品群を発表することになりました。熊野古道は、世界遺産に登録された巡礼道であり、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼道と姉妹提携をしていますが、その巡礼道はフランスを横切ってスペインに至る長い道のりであり、フランスと深いつながりがあります。教会の地下に聖ヤコブの墓があるサンティアゴ・デ・コンポステーラは、中世の昔からヨーロッパの巡礼者たちに人気の巡礼道で、当時からローマやエルサレムと並ぶ聖地でした。

フランスからの巡礼路には4本のルートがあります。一つ目は、アルルのアリスカンの古代墓地からサン・ジルを通る「トゥールーズの道」。二つ目は、聖母マリアの偉大な聖地として知られるル・ピュイ=アン=ヴレからの「ル・ピュイの道」。三つ目は、ヴェズレーの聖マドレーヌ大聖堂を起点にしてリモージュの聖マルシャル修道院などの聖地を訪れる「リモージュの道」、四つ目は、パリのサンジャックの塔を起点に、オルレアン、トゥール、ボワティエを経由する「トゥールの道」です。これら4つの主要路が、ピレネーの峠を越えてスペインに入りナバラ州のプエンテ・ラ・レイナで合流し、目的地へと続きます。

今年は丑年でもあり、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラでの個展開催を予定して準備を進めてきましたが、コロナ禍のために延期せざるを得なくなりました。そんな折、熊野本宮大社の宮司様よりご依頼を受け、4月11日～18日まで、世界遺産熊野本宮館瑞宝殿にて個展を開催することになりました。さらに、7月19日～25日には京都上賀茂神社において、個展を開催させて頂く機会を頂きました。熊野古道の個展を通じて、遠くフランスの巡礼道にも思いを馳せる機会になれば幸いです。



ショパンとフランス

知念 夕紀子(ちねん ゆきこ)

F. ショパンは祖国ポーランドへの強い思いを生涯抱き続けた作曲家であるが、彼が人生の半分を過ごしたフランスからは多くの影響を受けたに違いない、と私自身強く感じた。そのきっかけは、1年間のフランス滞在、特にノアンへの訪問であった。

20歳のときにポーランドを離れ、途中ウィーン滞在を経てパリでの生活を始めたショパンは、この地を「世界で最も美しい街」と言ったほど、パリを気に入り、そして7年間の同棲生活を送ることになる恋人サンドをはじめ、リスト（彼からサンドを紹介される）、ドラクロワなど、人生を揺るがす人々との出会いを果たした。ショパンの父ニコラも、もともとロレーヌのマランヴィル・シュール・マドン出身であり、ショパンとフランスの縁の深さを感じてしまう。こうしてフランスでさまざまな芸術的刺激を受けながら生活したのだろうと想像する。そしてサンドが祖母から相続したノアンの館へ毎夏滞在し、パリとノアンを行き来する生活を送るのだが、この期間に全体の3分の2に及ぶ作品が作り出された。

2016年の秋、ノアン訪問時に私が真っ先に強く感じたのが、この地がショパンの生家があるポーランドのジェラゾヴァ・ヴォラ（ワルシャワから1時間ほどの村）にとっても似ていることであった。私は過去2回、生家を訪問したことがあったが、閑閑な田舎で、あふれる自然や緑に囲まれ、本当によく似た風景であった。ノアンはショパンにとってまさに故郷を思い出す癒しの場所であるとともに、靈感の源でもあり、音楽はさらに深みを増し、数々の傑作が生みだされたのである。

時を隔てた今日もなお、ショパンの味わい深い作品の数々に触れるのは、至福のひと時であると感じる。同時に、彼の生きた証と、多くの運命が重なり合って生まれた音楽のメッセージを想像し、少しでも伝えていくことができるように、私自身も日々味わいを感じながらピアノと向き合っていきたい。



上：ノアンのショパンの小道(フランス)

下：ショパンの生家（ポーランド）

幼き日のフランスの思い出

曾我部 咲(そがべ さき)

奈良日仏協会1月に入会させて頂きました。ここ数年で私のフランスに対する興味が復活しています。2019年夏、学園前駅近くに「喫茶と雑貨 アンジュール」の名でお店を始めました。ゆっくり寛いでいただける空間で、至極ゆるい感じでございます。「アンジュール un jour」は一日一日を大切にしたいという気持ちと、「いつか」場所が変わっても、身ひとつでも、この経験を活力にして生きていけるように、という自分に対しての意味も込めています。

父亡き後の実家の空きスペースで何かお店を始めようか、というのが私と母の考えでした。考え出したら直ぐ行動！の母に背中を押され、翌年には空きスペースの店舗改装に着手、そして2019年にオープンいたしました。作家さん手作りの雑貨に囲まれて、珈琲、紅茶、焼き菓子、軽食を提供させて頂いております。店を始めたことがフランスへの興味の復活に繋がっています。「ゆくゆくは雑貨も現地フランスへ仕入れに行きたい」と、長いスパンではありますが、妄想は膨らみます。

そもそものフランスとの出会いは、幼少時に父の研究でパリの南郊マシーに滞在したことです。4歳の頃の思い出はほぼありませんが、微かな記憶にあるのは住んでいたマンション下の公園でフランス人の男の子にいじめられたこと、いつも泣いていた幼稚園でうっすら覚えている先生（「きれいちゃま」と呼んでいたらしい）の黄金の髪。

20代に入りフランス熱が再来。一念発起し、語学留学の目的で渡仏。トゥール Tours → パリ Paris → エクス=アン=プロヴァンス Aix-en-Provence に滞在。1年間の在仏中半分をエクスで過ごし、パリジャンから「南仏の訛りがある」と言われた時の喜びは、今も記憶しています。そんな幼少の頃の思い出（母から聞き植え付けられた感もありますが）や留学経験が、その後もフランスに特別な感情を持ち続けている所以です。仏語の発音が好き、フランス音楽が好き、南仏が好き、パリが好き、「いつか他の地方も訪れてみたい！」と、ただただフランス好きなので語るほどの知識はまだありませんが、お店の成長とともにフランス愛も育てていく所存です。

「母と兄たちと一緒に」(右から2人目が私)
35年前オルレアンに向かうロワール川にて

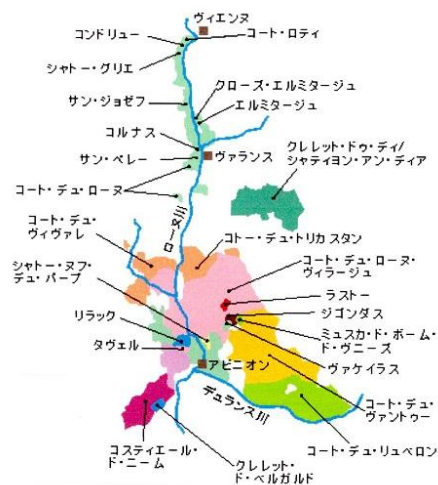
私の好きなワイン「コート・デュ・ローヌ」 小寺 順子 (こてら じゅんこ)

コート・デュ・ローヌ (Côtes du Rhône) は、フランス南部を流れるローヌ川に沿って、ヴィエンヌからニームまで南北 200km に延びるワイン産地で、26 の地域に分かれている (右図)。北部は総称して「セプタントリオナル」、南部は「メリディオナル」と呼ばれる。私はこの両地域のワインをほとんど網羅するほど飲んだが、いろいろな面白いワインに出会った。

コート・デュ・ローヌでは、赤ワインに白ワイン用の葡萄を混ぜることがよくある。北部の「エルミタージュ」では、15 パーセント以内なら白葡萄の品種「ルーサンヌ」と「マルサンヌ」を、赤ワインに混ぜてもいいことになっている。エルミタージュは赤の方がポピュラーだが、私はマルサンヌとルーサンヌから作られている白を飲んでいる。なかでも「エクスヴォト」というワインが好きだ。あまり辛くなく非常に飲みやすい。エルミタージュが買えない時は、隣の地区「クローズ・エルミタージュ」にする。エルミタージュより広いので価格もぐっと安い。

「シャトー・ヌフ・デュ・パップ」にも赤と白があるが、私はまだ白は飲んだことがない。以前「サン・ヴァンサン」(当協会法人会員) にバーがあった頃、2007 年のを飲んだら非常に美味しかった。ところが、同じワインを買って家で飲むと、それ程という味ではなかった。店主の竹中さんに尋ねると、「先に抜栓しておかなかったからですよ」と言われた。特に上質の赤ワインを飲むときには最低 1 時間ほど前に抜栓してワインを空気に触れさせると、味がまろやかになる。この頃は少し良い赤ワインを飲むときは、デキャンタージュ (décanter) して飲むようにしている。

最近狙っているのは、北の端の方にある「シャトーグリエ」だ。これは「ヴィオニエ」という品種で作られる白で、かなり値段が高いのでなかなか買えない。たくさんのワインの種類のあるコート・デュ・ローヌは、それぞれのワインが面白い。



ニューノーマルでのフランスワイン試飲商談会で思うこと 林 薫子 (はやし かおるこ)

2020 年 11 月 26 日にフランスの主なワイン産地から約 25 社の生産者、200 以上のアイテム (約 1000 本以上) を日本のワイン業界のプロフェッショナルに紹介するフランスワイン試飲商談会が大阪のリーガロイヤルホテルで開催されました (右写真)。

これは在日フランス大使館貿易投資庁・ビジネスフランスによって毎年開催される日本未発売のフランスワインを日本市場に売り込む試飲商談会です。昨年 11 月は「新型コロナウイルス感染拡大防止対策」のガイドラインに沿って開催されました。例えばこれまでの試飲会は、ホテルの会場に 100 人近く集まり、滞在時間無制限でしたが、今回は 1 時間ずつ 5 回の開催で各回定員 10 名の事前登録完全入れ替え制、グラスではなくプラカップでの試飲、試飲時以外マスク着用等、まさにニューノーマルでの試飲商談会となりました。

そしてなによりも大きな違いはフランスから生産者の来日がないこと。2019 年は約 30 名が来日し、試飲会場で通訳を介して日本のバイヤーやソムリエにワインを売り込み、まるでお祭りのようでした。今回は生産者の来日のない静かな試飲会で、日本のバイヤーはフランスのワイン生産者の演説や人柄に左右されることなく「品質と味と価格」で真剣にワインを選んでいるようでした。元来、試飲会の目的はフランスのワインを日本市場に売ることです。ただこれまでフランスの生産者にとって、日本への出張は日本食を楽しんだり観光したりとビジネス以上にリアルな日本を体験する機会でした。一見、遊びにきているようなフランス人の日本出張も実は貴重な「日本市場の研究旅行」だったかもしれませんね。

今後リモートビジネスやリモート商談会が続くと思いますがリアルとオンラインのバランスをとりつつ新しいビジネスを模索したいですね。



第 147 回フランス・アラカルト (3/13)「バティスト・レタヨさんをお迎えして」

ヴァンデ地方のご出身で、柔道に親しんだことがきっかけで、18 歳より日本語を勉強。11 年前に来日、現在奈良にお住いのバティスト・レタヨ (Baptiste RETAILLEAU) さんから、知られざるヴァンデ地方の魅力をたっぷりとお聞きます。

❖ 日時：3 月 13 日 (土) 15:00～16:30 ❖ 会場：生駒セイセイビル 2F 203・204 号 ❖ 定員：20 名

❖ 参加費：会員 500 円 一般 1000 円 ❖ 問合せと申込先：sugitani@kcn.jp tel:090-6322-0672 (杉谷)

❖ バティストさんからのメッセージ: Bonjour à toutes et tous ! Le 13 mars prochain je vous invite à découvrir une contrée de France très méconnue des Japonais (et même des Français) : la Vendée. Département agricole et dynamique du Nord-Ouest de la France, je vous propose une petite balade dans l'espace et dans le temps à la découverte de son histoire singulière (contre-révolutionnaire !), de son terroir et spécialités, de ses paysages et ses lieux touristiques les plus connus.

日本では (フランスでさえも) ほとんど知られていないフランスのヴァンデ地方のことを紹介します。ヴァンデはフランス北西部の農業がさかんで活動的な県ですが、その特別な歴史 (反革命!)、土地の名産物、風景、そして有名な観光地について知るべく、時空を超えるそぞろ歩きに、一緒に出かけてみませんか。



第 56 回奈良日仏協会シネクラブ例会 (2/28)『めぐり逢う朝』(Tous les matins du monde, 1991)

❖ 日時：2021 年 2 月 28 日 (日) 13:30～17:00

❖ 会場：生駒市セイセイビル 2 階 206 会議室

❖ プログラム：『めぐり逢う朝』(1991 年, 115 分)

❖ 監督：アラン・コルノー Alain Corneau

❖ 参加費：会員 100 円、一般 300 円

❖ 例会終了後の懇親会は中止

❖ 問い合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 090-8538-2300 (浅井)

❖ 映画の紹介は本誌 5 頁参照

《2020 年度第 6 回理事会報告》.....事務局 日時：2021 年 1 月 21 日 (木) 15:00～16:45。

場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、高松、喜多、藺田、三木、杉谷。

議題 1. 2021 年度会員数：90 件。議題 2. 11/19 理事会後の活動：(11/23) 秋の教養講座「カ

ミュ『ペスト』を読む」講師三野博司、(12/12) 第 3 回美術クラブ「美術の力」講師南城守。

議題 3. 今後の行事：(2/28) 第 56 回日仏シネクラブ例会『めぐり逢う朝』アラン・コ

ルノー監督、(3/13) 第 147 回フランス・アラカルト「バティスト・レタヨさんをお迎えし

て」。議題 4. 年次総会 (2/11)：(1/25) 総会案内発送、式次第と概要・2020 年度活動報告

と決算報告・2021 年度役員改選・2021 年度活動計画・予算計画等確認。議題 5. Mon Nara。

議題 6. その他：次回理事会 3 月 18 日 (木) 15:00～16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆奈良県立美術館にて広重の「名所江戸百景」展 (前期：1/16～2/14、後期：2/16～3/14) が開催

中です。☆「名所江戸百景」は美術史上画期的な風景画の連作で、19 世紀後半パリの芸術家や文化人たちを触発

した作品が何点も含まれています。マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』の林檎の木や花の描写にも、

広重の「梅」「桜」「雨」等が下敷きにあるのでは、との指摘もなされています。☆昨秋、恵那と由比の広重美術

館を訪れ、『木曾海道六十九次』『東海道五十三次』の作品群を目の前にした時、図録では気づかなかった細部に

発見がありました。一般的には日本の絵画や版画は影をつくらない平面的な画面構成とされていますが、西洋絵

画とは異なる様式で「影」が効果的に施された作品がいくつかあり、「目から鱗」の感慨がありました。☆今回の

奈良での展覧会、まずは前期展に出かけたところ、『富士三十六景』の中に、前景の赤い花の咲く椿の木の下と、

中景の川べりに、黄色い「菜の花」(colza) が描かれている作品があるのに気づく (出会う) ことができました。

☆菜の花といえば蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」(Ah! fleurs de colza / avec la lune à l'est et / le soleil à l'ouest)

の名句が浮かびますが、フランスの田園地方では今も春になると地平線の彼方まで広がる菜の花畑がみられます。

遠いフランスに想いを馳せながら、奈良の後期展での新たな出会いを楽しみにしているところです。(N. Asai)

◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。

◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2021 年 6 月号は **5 月 31 日**が原稿締切日です。

◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」(2 月、6 月、10 月発行) 又は「**Mon Nara 通信**」(4 月、8 月、12 月発行) に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2021 年 2 月号 numéro295

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afjn@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司